

震災乗り越え 輪島教会 献堂



9月27日、輪島教会の献堂式は青空の下、隣接する海の星幼稚園の園児らの元気な歌声から始まった（写真右は、幼稚園の園舎）



2024年1月、被災直後の輪島教会（左は前江田恒子さん提供）



被災後初めての復活徹夜祭。写真右は幼稚園ホール



解体され更地となった教会跡

■ 震災乗り越え 輪島教会献堂 1・2面

国際

■ 教皇、初の使徒的勧告で強調
信仰と貧しい人への愛は両輪 3面

■ 世界の飢餓は「集団的な怠り」
教皇、国連食糧農業機関80年で 4面

■ 教皇、「世界宣教の日」に列聖式 4・5面

■ 国際記事ダイジェスト 5・6面

国内

■ チンドン人生と「愛」 7面

■ 国内記事ダイジェスト 8面

本紙は無料です

■ 主日の福音解説 9・10・11面

■ 短歌・俳句 11面

■ 訃報・告知板・番組 12面

■ きょうをささげる（11月の祈り） 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。

カトリックジャパンニュース



カトリックジャパンダイジェスト 第7号

発行＝カトリック中央協議会広報部

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館

電話(03)5632-4435 FAX(03)5632-7030

国内

輪島教会 ボランティア拠点を併設 開かれた「希望の場」として

2024年1月の能登半島地震で全壊指定を受けた名古屋教区の輪島教会（石川県輪島市）は、公費による解体を経て再建され、9月27日、同教区の松浦悟郎司教により献堂式が行われた。教区内外から約80人が参加し、式の模様はライブ配信でも届けられた。会場と配信を合わせ、約280人が共に祈りをささげた。

名古屋教区は震災後、輪島教会に隣接する海の星幼稚園を通じて地域とつながり、以後1年9カ月にわたって被災者支援を続けてきた。新しい教会には、同教区の復興支援活動を担う「カリタス」とサポートセンター」（センター長・片岡義博神父〈同教区〉／以下、のとサポートセンター）のボランティア拠点（ベース）が併設されている。教区は今後も幼稚園と連携し、“希望のしるし”として地域の人々と共に歩んでいく。

教会と人々を祝福

輪島教会は、輪島市中心部に近い小高い山の中腹にある。松浦司教主司式による献堂式は、新しい教会の前で始まり、海の星幼稚園の園児らが『神様がわかるでしょ』などの歌を元気に合唱した。

松浦司教は教会の扉の前に立ち、「神の聖なる教会において、恵みと平和が皆さんとともに」と、ミサ開祭のあいさつを述べた。

聖堂へ司式者や参加者が入堂した後、松浦司教は司祭たちと共に、1階の聖堂や調理場、事務所など、また2階のベースも巡って聖水で祝福した。祭壇と、集まった参列者にも聖水を振りかけた。

松浦司教はミサの説教で、24年1月の地震、そして同年9月の大雨による被

害を振り返り、「祈りと支援を寄せてくれた多くの人と、共に歩み続けてくださった神様」への感謝を述べた。

名古屋教区は、被災した七尾市（石川県）でも同様に、七尾教会に隣接する聖母幼稚園と連携して支援活動を続けてきた。松浦司教は、両市での体験から、「教会が幼稚園やカトリック施設と協働していく」



ことの大切さに気付いたという。また、輪島教会の10年前のミサ参加者は5人ほどだったが、震災を機に増え、現在はフィリピン出身者を中心に20人ほどが集うようになっていると松浦司教は語り、新しい輪島教会を、全ての人に開かれた「希望の場」として使っていきたいと呼びかけた。

閉祭に当たり、輪島教会と海の星幼稚園を創設したカルメル修道会の今泉健神父（総長代理）があいさつ。輪島教会がいち早く再建されたのは教会関係者のためではなく、教会が苦しみ、悲しむ人々の復興のしるし、神は愛であることのしるしとなるためだと述べた。

「一緒に教会を広めていきたい」

同教会の信徒の一人は、こう話した。「聖堂は2007年の能登半島地震で一部損壊があって以来そのまま、それに加えて去年の地震被害です。（なくなってしまうと思われた聖堂が再び建つ）こんな日が来るなんて、私には奇跡としか

思えません」

フィリピン出身の横地レヒナさん（44／輪島教会）は、去年の能登半島地震の激震のさなか、思いがけず回心の恵みが与えられ、仲間との和解も体験。「新しい教会まで与えられて、感謝の気持ちでいっぱい」と話す。

海の星幼稚園の職員は、長年司祭が常駐していなかった輪島教会が被災し解体された後、教会を訪れる巡礼者らを迎えて交流してきた。園長の三笠真由美さんは、「私たち（園）も一緒に輪島教会を広めていきたい」と語った。

召命の原点に戻り、聖堂再建へ

片岡神父は震災以降、のとサポートセンターのセンター長として復興支援に取り組んできた。だが震災直後は、「自分には（復興支援活動は）無理」としか思えなかったという。石川県と富山県で小



片岡義博神父

教区の司牧を担当している上に、協働する司祭や信徒も高齢化しているためだ。

能登半島の各所で道路が崩れ、支援団体が被災者に水や食料を届けることも困難な状況で、片岡神父自身、輪島にたどり着くことのできない日々が続いていた。

そうした中、震災6日後の1月7日、カリタスジャパンやカトリック中央協議会の「緊急対応支援チーム」（現・カリタスジャパンE R S T）らと共に輪島入りを実現。片岡神父は、輪島の信徒や海の星幼稚園の園長らの「ほっとした表情」と涙して来訪を喜ぶ姿に触れ、素直に「あ、この人たちを孤立させてはいけないな」と感じたという。

そしてこの時に思い浮かんだのが、司祭叙階の際のモットー。聖書の「善いサマリア人」のたとえの箇所ではイエスが語った、「だれがその人の隣人になったと思うか」（ルカ10・36参照）という問いかけだった。

支援活動の中で都度、そのモットーを初心に返って見つめ直しながら輪島教会の再建にも携わった。10月8日にベースが開設され、「新しい教会がシンボルとなって、これからも能登の人たちの隣人であれるよう、歩んでいけたら」と片岡神父は話した。



輪島教会の新聖堂での献堂式ミサには約80人が集った

輪島教会献堂式記事全文▶



片岡神父記事全文▶



国際

教皇、初の使徒的勧告で強調 信仰と貧しい人への愛は両輪

【バチカン10月9日CNS】多くのキリスト者は「改めて福音書を読み直す必要がある」。信仰と貧しい人への愛は切り離せないことを忘れていたからだ、と教皇レオ14世は自身初の教皇文書で強調している。

「その貧しさの形態がどうであろうと、貧しい人への愛は、神のみ心に忠実な教会の福音的な証しです」と教皇は就任後初の「貧しい人への愛について全てのキリスト者に宛てた」使徒的勧告「ディレクシ・テ」（わたしはあなたを愛した）で宣言している。

教皇レオは10月4日、アッシジの聖フランシスコの記念日に、同使徒的勧告に署名し、バチカンが10月9日、本文を公表した。

同使徒的勧告の執筆は教皇フランシスコが始めていたが、教皇レオはそれに加筆し、自身の教皇職の早い段階で発表することを望んだ。「私は私の愛する前任者と願いを共にしているからです。全てのキリスト者が、キリストの愛と貧しい人を大切にすることへの招きの密接な関係を正しく理解するようになることです」

この結び付きは、新しくも現代のものでもなく、教皇フランシスコの発案でもない、と教皇レオ14世は説明する。実際に「聖書は初めから、弱く貧しい人を守る神の姿を通して、神の愛を生き生きと示してきました。それは神が特に貧しい人に愛情を注ぐといわれるほどでした」。

貧しい人を優先してきた教会

「私は確信しています。貧しい人の優先的な選択は、教会と社会の双方にとって、特別な刷新の源となるのです」と教皇レオは強調する。「私たちが自己中心的な姿勢から解放され、貧しい人の叫びに耳を傾けるようになりさえすれば、

それができるのだとしている。

教皇レオは5月の選出当初から、世界の富裕層と最も貧しい市民の間の格差を非難し、特に女性がしばしば「二重に貧しくされて」、子どもたちを養うのに苦労している上に、権利や機会まで限られていると指摘してきた。

さらに教皇レオは、教会が遅くとも1960年代から示してきた教説を再確認する。その教えは、社会の「構造的な罪」が貧しい人を貧しいままの状況に閉じ込めて、十分な資産を持つ人が貧しい人を無視するか、自分たちの方が優れていると考えるようになっているとする。

教会が説くように、神が貧しい人を優先することは、「神にとってはあり得ない」排他的な行いや他者を差別することを決して許さない、と教皇は説明する。

ただし、「貧しい人の優先的な選択」という表現が「意図しているのは、全人類の貧しさと弱さに心を動かされた神の行動を強調することなのです」。

さらに教皇レオ14世は説明する。「正義ときょうだい愛と連帯のみ国を望まれている神は、差別されたり抑圧されたりしている人を特にみ心に留めておられます。そして私たち、神の教会に対して、最も弱くされている人たちのために決定的で根本的な選択をするよう求めておられるのです」

その選択には、司牧的、霊的な配慮だけでなく、教育や医療、職業訓練や慈善事業も含まれ、その全ては教会が数世紀にわたって提供してきたことだと教皇は付け加えている。

移住者を大切にしてきた教会

同使徒的勧告の中では、特に移住者についての節があり、教皇はこう書いている。「教会は常に、移住者のうちに生きておられる主を認めてきました。主は裁きの時に、その右側にいる者たちに告げられます。『旅をしていたときに、宿を貸してくれた』」

「マタイによる福音書」の「すべての民族を裁く」項にある25章35節から引用されたこの箇所、イエスは、信者たちが貧しい人や病者、収監者、外



今年8月17日、ローマの南東30キロのカステルガンドルフォの「ラウダート・シ村」で開いた昼食会で、地元アルバーノ教区カリタスの支援を受ける人と話す教皇レオ14世(CNS)

国人への対応の仕方によって裁かれると、はっきりと宣言している。

「教会は母のように」、自分と家族のためにより良く、安全な生活を求めて「旅路に就いている人と共に歩みます」と教皇レオは強調する。

「世界が脅威を覚えているとき、教会はその子どもたちに目を向けます。壁が築かれている所では、教会は橋を築きます」と教皇レオは続ける。「教会は承知しています。福音を告げ知らせることが信頼を得るのは、それが寄り添いと歓迎の行いに表れているときだけなのです」

そして教会は知っている。「歓迎されない移住者たちのうちにキリストご自身がおられ、その共同体の戸口をたたいておられるのです」

教皇レオ14世は同使徒的勧告の中で、聖書の記述に言及して、貧しい人を愛して世話をする務めを強調し、教会の歴史の中で貧しい人との生活や奉仕に献身した聖人たちや修道会の行いを挙げている。

同使徒的勧告では、初代教会の神学者たち、「教会の教父たち」についての節があり、その中で教皇はこう強調している。教父たちは、「貧しい人のうちに、神に出会うための特権的な方法として、神に近づく恩恵の道を認めていました。困窮する人に向けられる慈善の業は、ただ単に倫理的な徳とされただけでなく、肉となられたみことばへの信仰の目に見える表現だと見なされていたのです」。



今年2月2日、路上で施しを求める女性(CNS)



2022年11月13日、「貧しい人のための世界祈願日」に、バチカンの謁見ホールに約1300人を招いて昼食会を開いた教皇フランシスコ(CNS)

国際

世界の飢餓は「集団的な怠り」 教皇、国連食糧農業機関80年で

【ローマ10月16日CNS】教皇レオ14世は10月16日の「世界食料デー」に、「数億もの人々の生死が飢餓によって左右されていることは、集団的な怠りであり、道徳的逸脱、歴史的な罪です」と訴えた。

教皇は同日、ローマの国連食糧農業機関（FAO）の本部を訪れ、世界の指導者や各国政府代表を前に演説した。FAOは当日、設立80年を式典で祝っていた。

教皇レオ14世は演説で、人類が科学技術や医学、農業や輸送の分野で大きく進歩を遂げたにもかかわらず、6億7300万人が毎晩、空腹のまま寝床に就き、23億もの人々が健全な食事を取れていないという事実を嘆く。

このFAOによる統計値は単なる数字ではなく、「こうした数値一つ一つの背後には、破綻した人生、弱くされた共同体があるのです」と教皇は強調する。

「これは偶然の一致ではなく、明らかなしるしです。無感覚や魂のない経済、疑わしい開発モデル、不公平で持続不可能な資源の分配がはびこっているのです」と教皇は訴える。

食料を武器とする「残忍な戦略」

教皇は、恐らくパレスチナ・ガザの状況だけでなく、他の戦場にも言及して、「現在の紛争の場面では、食料を戦争の武器として使う手法が戻ってきています」と警鐘を鳴らす。

「故意にもたらされる飢餓や共同体または民族全体に対する食料入手の意図的な妨害は戦争犯罪に当たる」とする世界的な認識が薄れているように思われる、と教皇は批判する。

食料を戦争の武器として使う「残忍な戦略」は、「多くの人々と子どもたちを飢餓に陥れ、その最も基本的な権利である生きる権利を奪うのです」。

何もしないのは「不正義への加担」

教皇レオは指摘する。各国政府には明らかに飢餓に対処する務めがあり、誰もこの問題の責任が他者にあると考えることはできない。

「飢えに苦しむ人々は、見知らぬ他人ではありません」と教皇は強調する。「その人たちは、私の兄弟姉妹なのですから、すぐに助けなくてははいけません」

飢餓は「天に向かって上がる叫びで、あらゆる国家や国際機関、あらゆる地域、地方、また一般の組織による迅速な対応を求めています」と教皇は訴える。「この闘いは、私たち全員のものです」

「一握りの人々が全てを得て、あまりにも多くの人が何も持たない不平等を、ど

う説明することができるでしょうか」と教皇レオ14世は問いかける。

教皇はさらに指摘する。「私たちはどうして、死と苦難に追いやられている全ての人々を思い起こさずにいられるのでしょうか。ウクライナ、ガザ、ハイチ、アフガニスタン、マリ、中央アフリカ共和国、イエメン、南スーダン。こうして挙げてみても、地球上のこれらの場所で、貧困があまりにも多くの兄弟姉妹たちの日常になっているのです」

どんな個人や政府も、目を背けることはできないと教皇は強調する。「私たちはこうした人たちの苦しみを、自分のものとして捉えなくてはなりません」

行動を起こさないことは、たとえそれが個人によるものであっても、「不正義の促進に加担する」ことになる、と教皇は指摘する。

「私たちは、自分たちが受けたものを進んで分かち合おうとしないなら、より良い世界、明るく平和な未来は望むべくもありません」と教皇レオ14世は訴える。「そうしてこそ初めて、私たちは真理と勇氣に支えられて、誰も取り残されていないと断言することができます」



10月16日、「世界食料デー」に、ローマの国連食糧農業機関（FAO）本部での設立80年を記念する式典で演説し、喝采を浴びる教皇レオ14世（CNS）

神の正義はゆるしの形で表れる 教皇、「世界宣教の日」に列聖式

【ローマ10月19日CNS】教皇レオ14世は10月19日、「世界宣教の日」に7人の福者を列聖し、神は常に罪もなく苦しむ人のそばにおられ、その正義はゆるしの形で表れると強調した。

「神は全ての人を公正に扱い、ご自分のいのちを与えてくださいます」と教皇はバチカンのサンピエトロ広場でささげた列聖式ミサの説教で語った。毎年、10

月の最後から2番目の日曜日に記念される「世界宣教の日」に、教会は宣教者たちと、その福音宣教や教育、医療ケアなどの奉仕活動のために祈りをささげる。

「実際、この信仰は私たちの正義への取り組みを支えてくれます。それはまさに私たちが、神は愛によって世界を救ってくださり、私たちを運命論から解放してくださると信じるからなのです」と教

皇は説明する。「私たちが困難のうちにある人々の叫びを聞くとき、自問しましょう。イエスが全ての人に対してなさったように、私たちは御父の愛を証しできているだろうか」

イエスは「謙遜な方で、高ぶっている人に回心を求めます。そして正しい方で、私たちに正しく導いてくださいます」。

地上の信仰は「天の希望を支える」

教皇レオ14世は、就任後2度目の列聖式で、19世紀から21世紀に生きた7人の男女を聖人に上げた。

そのうち2人はベネズエラ初の聖人と

国 際

なった男女で、修道会を創立した修道女と信徒の医師だった。同時に列聖された他の5人には、サレジアン・シスターズ（扶助者聖母会）のイタリア人修道女で、エクアドルで宣教していたが飛行機事故で死去した聖マリア・トロンカッティやパプアニューギニア初の聖人となった信徒カテキスタ（要理教師）の聖ピーター・ト・ロト殉教者がいた。

教皇はミサの説教で、新聖人たちは「キリストの忠実な友」で、「何かの理想を体現する英雄でも擁護者でも」なく、信仰の故の殉教者、福音宣教者、カリスマにあふれる修道会創立者として、「人類に恩恵をもたらした人たち」だったと称賛した。

「こうして地上で信仰を生きることは、天の希望を支えます」と教皇は強調する。

実際、イエスは弟子たちに、「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」（ルカ18・1）と教えている、と教皇レオは指摘する。「呼吸が体のいのちを支えるように、祈りも魂のいのちを支えます。その証拠に、信仰は祈りのうちに表れ、真の祈りは信仰によって生きるのです」

「私たちと共に十字架につけられる」

当日の福音箇所「やもめと裁判官」のたとえで、イエスは弟子たちに神が誰に対しても公正な審判者であることを信じるかと問いかける。そして、「私たちは神が常に私たちの幸せと全ての人の救いを願っていることを信じているか」が問われている。

この問いが重要なのは、この信仰が試される二つの誘惑があるからだ、と教皇は説明を続ける。一つ目の誘惑は、「悪によるつまずきから力を得ます。神は抑圧された人の叫びも聞かず、罪もなく苦しむ人にもあわれみを覚えないと私たちに思わせるのです」。

「二つ目の誘惑は、神が私たちの望み通りにしてくださるとする思い込みです。そうになると、祈りは神に対する命令口調になってしまい、どうすれば公正で都合良くなってもらえるかを指示するまでになります」

教皇レオは指摘する。イエスは、「この二つの誘惑から私たちを解放してください」。特に主は受難の際に、こう祈る。「父よ、御心の^{みこころ}ままに行ってください」（ル

カ22・42参照）。

「キリストの十字架は神の正義を示します。そして神の正義はゆるしです。主は悪をご覧になり、ご自分の身にそれを引き受けることによりあがなわれます」と教皇は続ける。「私たちが痛みや暴力によって、憎しみや戦争によって、『十字架につけられる』とき、キリストは既にそこにおられ、私たちのために、私たちと共に十字架につけられているのです」

「神が慰めてくださらない叫びはありません。主のみ心から遠く離れた涙はありません」と教皇レオ14世は強調する。「主は私たちに耳を傾け、ありのままの私たちを抱き締めてくださり、私たちをご自分のようにつくり変えてくださるのです」



10月19日の「世界宣教の日」、バチカンのサンピエトロ広場で7人を列聖したミサの後、広場をパパモービレ（教皇特別車）で巡って、会衆にあいさつして回る教皇レオ14世（CNS）

教皇、トルコとレバノン訪問へ
11月27日から12月2日

【バチカン10月7日CNS】教皇レオ14世は就任後初の国外訪問で、11月27日から12月2日まで、トルコとレバノンを歴訪すると教皇庁広報局が発表した。

この訪問は教皇フランシスコが東方正教会コンスタンティノーブル総主教のバルトロマイ1世と交わしていた約束を果たすため、その目的はニケア公会議開催1700年と全ての主流派キリスト教徒が唱えるニケア信条の起源を記念することにある。



5月30日、バチカンにバルトロマイ1世を迎えた教皇レオ14世（CNS）

教皇、マリアの霊性の祝祭で促す
真の信仰はイエスを中心に据える



10月11日、現物のファティマの聖母像の前で祈りをささげる教皇レオ14世（CNS）

【バチカン10月12日CNS】キリスト者は信仰によって、自分とは違う人や、特に貧しい人を避けたり、退けたりしてはならない、と教皇レオ14世は警鐘を鳴らす。

教皇は10月12日、サンピエトロ広場でささげた聖年の「マリアの霊性の祝祭」のミサ説教で指摘した。「真のマリアの霊性は教会に、神の優しさと神が示される母性をもたらすのです」



公正で恒久的な平和の実現を願う
教皇、ガザ和平案第1段階合意で

【バチカン10月12日CNS】パレスチナ・ガザでの和平案「第1段階」の合意を受けて、教皇レオ14世は全ての人を尊重する公正で恒久的な平和の実現を願っている。

「私たちは、人類に真の平和を与えてくださる神に願います。全ての傷を癒やし、今は人間にはできないと思われることを恵みによって成し遂げる助けとなってくださいますように」と教皇は10月12日、祈った。



10月12日、ガザ市で、イスラエル軍が撤退した後のがれきの中を歩くパレスチナ人の住民（OSV）

国 際

教皇の一般謁見講話 「どん底」でも救ってくださる神

【バチカン9月24日CNS】人は「どん底」の状態であっても、神が既に共におられ、手を差し伸べて救ってくださることを確信できる、と教皇レオ14世は説いている。「孤独や辱め、見捨てられる体験、生きる上での労苦といった日々の陰府」の中であっても、キリストは下ってきて、「御父の愛を証しして下さいます。裁くのではなく、解放するため、罪に定めるためではなく、救うためです」



記事全文



動画

教皇、「カテキスタの祝祭」で 人生を変える愛の真理を伝える

【バチカン9月28日CNS】カテキスタ（要理教師）が教える際には、その目的はただ信仰を伝えるだけでなく、「いのちのことは心に刻んでもらい、良い人生の実りを結んでもらう」ことにある、と教皇レオ14世は説く。



記事全文



動画

教皇の一般謁見講話 愛される喜びを伝える使命

【バチカン10月1日CNS】人間的な欠点があっても、神に愛される喜びを伝えることがカトリック教会の使命だと教皇レオ14世は指摘する。

教皇は強調する。イエスが使徒たちに委ねる務めは「世の和解の道具になるということです。主はこう言われているかのようです。『だれが御父のいつくしみ深いみ顔を告げ知らせることができるだろうか。失敗とゆるしを経験したあなたがた以外に』」



記事全文



動画

移住者の歓迎も福音宣教に 教皇、聖年の祝祭で訴える

【バチカン10月5日CNS】聖年の「移住者の祝祭」と「宣教者の祝祭」を同時に祝うことは、全てのカトリック信者に移住者を歓迎して支えることも神の愛を伝える務めの一環だと思い起こさせる機会になる、と教皇レオ14世は強調した。

「兄弟姉妹の皆さん、今日、教会の歴史で新たな宣教の時代が始まります」



記事全文



動画

ガザ停戦交渉は「最初の一步」 エルサレム総大司教、祈り促す

【エルサレム10月6日OSV】イスラエルとイスラム組織ハマスによる間接停戦交渉が10月6日、仲介国エジプトのシャルムエルシェイクで始まり、米国のドナルド・トランプ大統領の和平案に基づいた停戦合意を目指すことを受け、ラテン典礼エルサレム総大司教のピエルバッティスタ・ピッツァバッラ枢機卿は、この交渉を「重要で長く待たれた最初の一步」と歓迎した。

ただ同枢機卿は、「まだ何も確定しているわけではない」と注意を促す。



記事全文

教皇の一般謁見講話 主は一緒に歩んでくださる

【バチカン10月8日CNS】その旅路がどれほどありきたりだったり、または不安定だったりしても、イエスは常にあらゆる人と一緒に歩いておられる、と教皇レオ14世は強調する。

「復活された方は、まさに私たちが暗闇の中にいる時に寄り添ってくださるのです。それは私たちが挫折を味わっている時、人間関係で消耗している時、日々肩に重くのしかかる苦闘の時、不安を招く疑いの時です」



記事全文



動画

教皇の一般謁見講話 この世の力に人生の意味はない

【バチカン10月15日CNS】権力や財産や地位では、人生の真の意味を求める切望を満たすことはできない、と教皇レオ14世は説いている。

復活されたイエスは、「私たちの渇きを癒やしてくださる泉です。この限りのない渇きは、聖霊が私たちの心に注いでくださる豊かないのちへの渇きなのです」と教皇は説明する。「実際、キリストの復活は単なる人類史上の出来事ではありません。人類の歴史を内面から変えた出来事なのです」



記事全文



動画



▲9月24日、バチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見の前に、パパモビレ（教皇専用車）で広場を巡り、赤ちゃんにあいさつする教皇レオ14世（CNS）



▲10月5日、雨の中、教皇レオ14世がバチカンのサンピエトロ広場で主司式した聖年の「移住者の祝祭と宣教者の祝祭」のミサに参加した巡礼者たち（CNS）



◀10月5日、聖年の「移住者の祝祭」と「宣教者の祝祭」に全世界から集まった、数万人の移住者や宣教者と共にささげたミサの説教で話す教皇レオ14世（CNS）



▲10月6日、イスラエル軍の侵攻によりパレスチナ・ガザ北部から退去させられて中部に避難し、仮設テントの間に立ち尽くす幼いパレスチナ人の子ども（OSV）



▲10月8日、バチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見の後、米中西部シカゴ教区内のカルメル山の聖母カトリック校の生徒たちと記念写真に収まる教皇レオ14世。生徒たちは教皇が選出される前の5月6日に模擬コンクラーベ（教皇選挙）を開いて、注目を集めていた（CNS）

国内

チンドン人生と「愛」

さとの たつる
里野立さん（47／千葉・西千葉教会）は、屋号「ちんどん喜助」のプロチンドンマン「豆太郎」として宣伝の仕事の傍ら、演劇の舞台にも挑戦しているアーティストだ。里野さんは昨年11月、生まれて間もない長男に難病が見つかり、今年4月まで妻と共にその闘病に寄り添ってきた。人生をかけた仕事と幼い長男の病を通して、「愛」について考えたという里野さんに話を聞いた。

きくの や しめまる
菊乃屋メ丸親方との出会い

里野さんは東京・杉並区で生まれ、3歳から千葉で過ごした。所属した西千葉教会は青年会が盛んで、ギターを教えてもらってバンドを組むなどした思い出がある。

大学は仙台で心理学を学ぶ。そこで芝居にも取り組んだ後、前衛芸術である「舞踏」を学ぶために上京。やがてチンドンの仕事に興味を持つようになった。

「それまでは芝居や音楽をやってきましたが、自分自身をアピールするのは（自分としては）違うなと思いました。（スポンサーの宣伝をする）チンドンの仕事は（観客からの）拍手も強要しないし、誰に対しても腰を低くしているのがいいなと思ったんです」

28歳の時、東京でチンドン一筋に仕事をしていた故・菊乃屋メ丸親方を訪ね、仲間に入れてもらうことができた。

この選択は家族の反対を受けたが、メ丸親方の下で6年間修業し、2010年に「ちんどん喜助」として独立。里野さんは「（自分が代表になって）立ち上げたものの、自分の未熟さでうまくいかないこともありました。『何一つ人を幸せにできていない』と沈んだこともありました」。

「苦しい時は（今でも）親方が目に浮かぶんです。『里野くん、大丈夫だよ』って」

太郎ちゃんとの日々

里野さんは、富山市で毎年4月に開催される「全日本チンドンコンクール」に出場を続けている。だが今年のコンクールには、今までとは全く違う心持ちで挑むことになった。前年11月末に生まれたばかりの長男・太郎ちゃんが、病気と闘っていたからだ。

太郎ちゃんが誕生した3日後、仕事に出ていた里野さんに妻から電話がかかってきた。担当の看護師が太郎ちゃんの様子に違和感を覚え、別の病院で精密検査を受けることになったのだ。太郎ちゃんは



さとの たつる
里野立さん

そこからさらに、東京・世田谷区の国立成育医療研究センターに搬送された。

里野さんは仕事から戻り、急いで同センターに駆け付けた。里野さん夫妻に医師は「落ち着いて聞いてくださいね」と前置きしてから病状を説明した。

太郎ちゃんは先天性の染色体異常である「オルニチントランスカルバミラーゼ（OTC）欠損症」だった。肝臓からたんぱく質を分解する酵素が出ないため、アンモニアの解毒ができず、体中を巡ってしまう、8万人に1人の難病だ。この日から太郎ちゃんは入院し、治療を受けることになった。

入院後、太郎ちゃんは小腸の半分ほどにも異常が判明。母乳もミルクも取ることができず、点滴での栄養補給と人工透析が続けられた。

里野さんは仕事の合間を縫っては、病室の太郎ちゃんに会いにいった。「透析を受けて体はだるかったんじゃないかと思いますが、（成長につれて）呼びかけに応えるようになっていきました」。音楽好きの里野さんに似たのか、太郎ちゃんは音が好きだった。アフリカの楽器カリンバを持って行き、里野さんが音を出すと、太郎ちゃんは「めちゃくちゃ興奮して、笑顔で『うわーっ』と喜ぶんです」。

体の小さい太郎ちゃんは、点滴を入れられる場所が体に4カ所しかなく、そこから病原菌が入ってしまうことが一番の心配だった。

4月4日、里野さんがコンクール参加のため富山に着くと、妻から電話が入る。病原菌が体内に侵入し、太郎ちゃんは感染症にかかっていた。医師は、「今夜が最期かもしれません。もし今夜、（里野さんが）東京に帰ってくるならそれまでは命を延ばすことができます」と告げた。

里野さんは東京へ帰ることを選ばなかった。妻も「やったら」と

背中を押した。病院スタッフは病室に大きなモニターを運び入れ、太郎ちゃんに翌5日のコンクール予選に出場した里野さんの舞台を見せてくれた。そして父の舞台を生まれて初めて見た日の夜中、太郎ちゃんは息を引き取った。

思い至ったのは「愛」

里野さんは到底言葉にすることのできない思いを笑顔の下に隠し、コンクールを最後までやり切った。終了後、急いで自宅に帰ると、太郎ちゃんは既にひつぎの中にいた。里野さんは「子どもが生まれたら教会に連れていくつもりだったが、妻と話し合い、「お別れの会」を自宅で開いた。集まった友人一人一人に、太郎ちゃんを抱いてもらったという。

休む間もなく、里野さんは次の舞台への出演が控えていた。突然の別れに心の整理がつかないまま、5月末までの公演を駆け抜けた。

8月、里野さんはスコットランドで開かれた演劇祭で舞台に立った。出会った役者から、「（里野さんには）キリスト教的な考え方がある」と指摘されたという。里野さんは「自分の人生はイエス様の教えと分かち難くあると思う」一方で、他宗教の考え方や哲学にも関心を向けてきた。スコットランドから帰る飛行機の中で、里野さんはこう思い至った。

「それら（宗教や哲学）の考え方で、生きることの意味を分解するように解釈したとしても、それらを再び統合するものは『愛』なんじゃないか」と。「太郎ちゃんと一緒にいる時は、そこまで思いませんでした」

里野さんには、まだ言葉にできない思いがたくさんあるが、徐々に「自分の歩みをちゃんと歩む」という思いを妻と共有するようになってきた。

今、里野さんは他の多様なジャンルの芸術に関わる人たちと新しい表現を生み出すことも考え始めている。



記事全文



先頭でちんどん太鼓をたたきながら商店街を練り歩く里野立さん（本人提供）

国内

今とつながる「近代日本」の神学を再確認 日本カトリック神学会

「日本カトリック神学会」は9月8日と9日の2日間、東京・練馬区の日本カトリック神学院で第37回学術大会を開催した。総合テーマは、「日本の近代国家形成期のカトリック神学」。



▲「近代日本」の神学を再確認 日本カトリック神学会

貧困と孤独、両方を癒やす 長崎「みんなの食堂」

長崎市の西坂公園で3～4カ月に1度、日曜の午後開かれる「みんなの食堂」では、さまざまな理由で日々の生活に苦しんでいる人を支えることを目的に、食料・生活用品の配布や相談が行われている。



▲長崎・西坂公園での「みんなの食堂」

セバスチャン木村を記念する長崎巡礼 日本カトリック神学院

日本人最初の司祭・セバスチャン木村(イエズス会)ゆかりの地、長崎を日本カトリック神学院(東京・練馬区)の神学生と養成担当司祭らが9月10日から13日にかけて巡礼した。今年から記念日(9月10日)の名称は「日本205福者殉教者」から「福者セバスチャン木村と204殉教者」に変更された。



潜伏キリシタンの遺産を継承する「禁教期のキリシタン研究会」講演会

禁教期(1614～1873年)の長崎と熊本・天草の潜伏キリシタンの信仰や価値を知り、未来につなぐ取り組みについて語る講演会が9月23日、東京・千代田区の上智大学で開かれた。



▲南海トラフ地震想定 京都教区と CJ-ERST が研修

南海トラフ地震想定 京都教区と CJ-ERST が研修

カトリック中央協議会の「カリタスジャパン緊急対応支援チーム」(CJ-ERST)は9月26日、京都教区本部事務局(京都市)で災害対応ワークショップを開催した。テーマは、「南海トラフ地震が起きた場合の教区の初動対応」。



前教皇最後の回勅『主はわたしたちを愛された』日本語版発行

前教皇フランシスコの最後の回勅『主はわたしたちを愛された』(原題『ディレクシット・ノス <Dilexit nos>』)の日本語訳が完成し、10月初め、カトリック中央協議会から発行された。



▲聖書普及事業150年記念式典

聖書普及事業150年 東京カテドラルで記念式典

日本での聖書普及事業開始から150年を迎え、記念の式典が10月1日、東京カテドラル関口教会(東京・文京区)で行われた。約380人が集い、「神の言葉」である聖書の普及に尽くした人々の働きに神の祝福を祈った。



「一人の100歩より100人の一歩」 ラウダート・シ10周年記念シンポジウム

前教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』が出されて今年で10周年を迎える。それを記念し「エコロジカルな霊性」について考え、分かち合うシンポジウムが10月4日、福岡市のサン・スルピス会旧神学院で開かれた。



「あなたの周りにおける福音」を動画に シグニス・ジャパンが作品募集中

身近な生活や体験の場で見いだす「福音」を取り上げた短編動画を11月30日まで、シグニス・ジャパン(カトリックメディア協議会)が募集している。呼びかけには「あなたの周りにおける福音を見つけて、動画作品を」とある。



▲日本カトリック正義と平和全国集会

日本カトリック正義と平和 全国集会 シンポジウムと9分科会で平和の道を探る

42回目となる「日本カトリック正義と平和 全国集会」が10月12、13日の2日間、仙台市の元寺小路教会を主会場に開かれた。福島^{もとてらこうじ}の原発事故や沖縄の米軍基地、パレスチナやウクライナで起きている虐殺、技能実習制度などのさまざまな社会問題を解決するための活動に関わる司祭、修道者、信徒ら200人以上が集い、うち21人は韓国から参加した。



▲「太陽の賛歌」800年記念シンポジウム

アッシジの聖フランシスコ「太陽の賛歌」 作られて800年 その精神を学ぶ

アッシジの聖フランシスコによって「太陽の賛歌」が作られて、今年で800年を迎えた。フランシスコ会日本殉教者管区は10月13日、東京・世田谷区の瀬田教会で記念シンポジウムを開き、約130人が学んだ。



主日の福音解説

11月2日（死者の日）
ヨハネ 6・37－40など

拝啓、主任神父様

人生最大の恩人は誰だろうと考えることがある。生者の中に大切な恩人がいることは間違いないが、「最大の」という言葉を恩人の前に補って絶えず思い起こす人々が、死者たちの中にいるのもまた事実である。長崎教区司祭・畑中栄松神父（1914～92年）はその一人だ。1983年から92年まで、地元、長崎県五島市・井持浦教会の主任司祭であった。私の年齢で言うと13歳から22歳。ちょうど長崎公教神学校に入学した中学1年から福岡サン・スルピス大神学院の哲学科2年までに当たる。時に優しく時に厳しく、常に深い愛情をもってご指導くださり、多くの信徒に慕われた司祭だったが、晩年は病気を患い、入退院を繰り返す日々であった。

92年12月、容体が悪いとの知らせを受け、冬休みに入ったばかりの大神学校から直接、長崎市の病院に向かった。病室に入ると、ベッドの上の神父様は目を閉じたまま静かに呼吸をしておられた。「神父様、ただいま！」と声をかけると、ゆっくりと目を開け、私を認めた。そして、小さな声で「来年は神学科1年生たいね」と言われた。やや間があって、「はい」と私も小さな声で答えた。大きな声を出せば病人に障るからという配慮によるものではない。

その後、めいに当たる付き添いのKさんに支えられながら、神父様はなんと病床からお祝いを渡された。「こいでスータン（聖職者の正装）ば作れ」「神父様、まだ早かです」「よかけん、取れ!」。受け取ってしまった後、涙がひとりでにあふれてきた。私は嘘をついたのである。翌年は神学科に進むどころか、勉強を怠けていて落第し、大神学校を休学することが決まっていたのだ。しかし、



重篤の病人に向かって、どうしてそんなことが言えただろう。

結局、それが最後の会話になった。翌朝、帰天の知らせが届いた。あんなにかわいがっていたのに、最後は嘘をついて別れてしまった。最大の恩人に最後にかけた言葉が嘘だったとは、世界中探してもこんな愚か者はいないと思う。

死者の日に朗読される福音には次のような言葉がある。「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである」（ヨハネ6・39）。イエスは、たとえ小さな一人であっても、それを失うことは父の本意ではないと言う。ここを読みながら「あの日…」と、私は思う。あの日、主任司祭に本当の事を話して彼を苦しめ悲しませることは、私の本意ではなかったと。

約束の年から2年遅れてスータンは無事に完成した。落とした大学の単位を取って神学院に復学したのである。あの時のスータンを今も大事に着ている。さすがにかなりの傷みようだが、いつまでも着ていたい。そして、かの日には、そのスータンを私に着せていただきたいと願う。天国で主任司祭との再会が許されるなら、それを着て今度はきちんとお礼を言いたいと思う。

（熊川幸徳神父／サン・スルピス司祭会）

11月9日（ラテラノ教会の献堂）
ヨハネ 2・13－22

私自身を清める

今日、教会はラテラノ教会の献堂を祝います。ラテラノ教会は現在、ローマの司教座教会であり、「ローマと世界のすべての教会堂の母であり頭」と呼ばれています。つまり、ラテラノ教会の献堂を記念することは、使徒ペトロから受け継いでいる教会の信仰を告白し、一致を祈るという意味があります。ラテラノ教会にはイエス様が最後の晩餐を行ったといわれる食卓の聖遺物が保管されているので、毎年教皇様はここで聖木曜日の主の晩餐のミサをささげているのです。

さて、今日の福音で、イエス様は神殿を清められます。その方法というのは、商売人や両替人たちを神殿から追い出すことでした。イエス様の時代の人々は供え物として牛や羊などの動物を用いていました。ところが、遠くから来る人々は牛や羊などの供え物を準備することができませんでした。そこで、そのような人々のために神殿の境内に商売人や両替人たちが出てきたのです。そもそも神様が供え物をお定めになったのは、人々が心を込めて供え物を準備し、奉獻することによって神に礼拝をささげ、感謝をささげるためでした。

ところが、商売人や両替人たちが神殿の境内に登場してから、人々はお金さえあれば心を込めて供え物を準備しなくても手軽に祭儀をささげることができるようになりました。供え物を準備する本来の精神は色あせて、神殿で祭儀をささげるためには、まずお金が幾ら必要か計算することになってしまいました。イエス様はそのような思いを神殿から追い出して神殿を清めようとされたのです。

わたしたちは今日、イエス様が清めようとされる神殿がわたしたち自身を意味するのだと理解することができます。なぜなら、使徒パウロはわたしたちが生ける神の神殿（二コリント6・16）だと言いましたし、またわたしたちの体は聖霊が宿ってくださる神殿（一コリント6・19）だとも言ったからです。

商売する人は自分の利益と損害を計算します。わたしたちもしばしば信仰生活の中で自分の利益と損害をはかりにけることもあるでしょう。教会に行くと自分にどんな利益があるのか？ 時間を割いて祈ることは自分ににとって無駄ではないか？ そういう観点から、今日イエス様が清めようとされる神殿とは、わたしたち自身に他なりません。わたしたちは自らを清めることができないので、今日イエス様は多少厳しく振る舞い、神殿（わたしたち）を清めようとされたのです。

わたしたちは、これまでどれだけかたくなになっているのか、どれほど教会で神と取引をして損得を計算してきたのかを振り返らなければなりません。そしてイエス様が神殿から商売人たちを追い出したように、わたしたちも損得勘定を捨て去り、イエス様に自分自身を委ねて清めていただき、清い神の神殿になることに致しましょう。

（ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会）



主日の福音解説

11月16日（年間第33主日）
ルカ 21・5－19
貧しい人のための世界祈願日

やさしさは人々を癒やす翼

被災されたお家の片付けをするボランティアに参加した時の話です。そのお家は全ての家財道具が使えなくなり、処分のためにそれらを家の外に出す作業をさせていただきました。作業が始まると家主のお母さんが来られ、庭に座って片付けられていくご自宅をじっとご覧になっておられました。

しばらくしてお母さんはどこかへ行かれました。お帰りになられたと思っていました。しかし、お母さんは手に買い物袋を下げて戻って来られ、「休憩の時に」とわたしたちに飲み物とお菓子を下さいました。全て甘い物で、わたしたちの疲れを癒やすためにと買い物されたのです。わたしたちは驚き恐縮しました（ボランティアは本来何かを頂くことはできませんが、皆で話し合い、ご厚意に甘えさせていただきました）。お母さんは午後にもまた買い物をされ、わたしたちに甘い飲み物とお菓子を下さいました。

お母さんにお話を伺いましたら、被災当時の壮絶な体験を語ってください、わたしたちがボランティアに伺った当時、お父さんと避難所暮らしをされているとのことでした。ご自身は大変な状況で、建物以外は全てを処分するお家をご覧になりながら、わたしたちボランティアのために飲み物とお菓子を届けてくださったのです。

今日は貧しい人のための世界祈願日です。今日の福音の朗読箇所は5節からですが、21章は神様に全てをささげる女性の話から始まり、今日のみ言葉はこの女性の行いによって理解できます。まず、ルカ福音書21章の1節から4節を読んでください。

イエス様は献金する人々の中から、レプトン銅貨2枚を入れる女性を見ました。彼女が持っている全てをささげたのです。そして弟子たちに、そこに全てをささげる人がいると知ること、イエス様ご自身もその人と一緒にいると教えられているようです。

5節からは戦争、暴動、大きな地震、飢饉、疫病、迫害など、あらゆる痛み、苦しみに遭ったとき、うろたえず、忍耐する（自分の場に踏みとどまる）ようにとわたしたちに教えておられます。

それは無理に我慢しなさいと言っているのではありません。イエス様はわたしたちに「知ってください」と声をかけ続けておられます。あなたたちが忍耐し、踏みとどまることができるのは、苦しみの中でも人を思いやり、持てるだけのやさしさを惜しみなく与えようとしてくれる人が必ずいるからだと教えておられるのです。

カトリック教会があるところには、必ずカリタスという団体があり、今この瞬間も戦争、災害



人々のためにとボランティアに行かせていただきましたが、太陽のようなお母さんと出会い、わたしたちの心は暖かく照らされ、やさしさの翼で癒やされました。

（寺浜亮司神父／福岡教区）

11月23日（王であるキリスト）
ルカ 23・35－43
世界青年の日

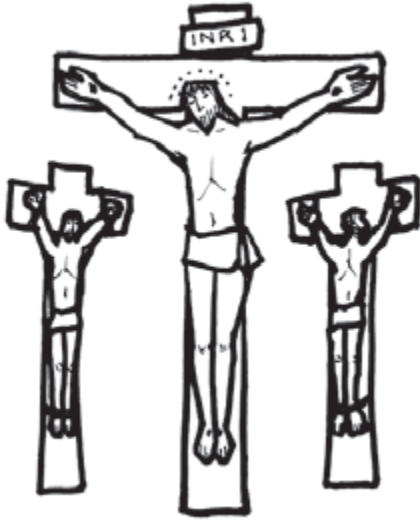
十字架のイエスこそ王である

十字架にはりつけになっているイエスとそれを取り巻く者たちの様子を描いているのが本日のルカ福音書の内容です。

十字架のイエスを真ん中にして信じない者と信じる者に分かれている構図になっています。

イエスを信じない者とは議員たち、兵士たち、犯罪人の一人です。彼らはイエスをユダヤ人の王にも、メシアにもなり損ねた男としてさげすむように見下しています。

信じる者とはもう一人の犯罪人です。彼は十字架にはりつけになっているイエスの中に本当の王、救い主の姿を見いだしています。



信じない者たちがイエスに浴びせている言葉は共通しています。「自分を救ってみろ」です。

多くの奇跡を行って他人を救ってきたのだから、自分を救うことくらい簡単だろう。ユダヤ人の王、メシアなら十字架から降りられるはずではないか。

しかし、イエスにはそれができないのだから王でも救い主でもない。このように、イエスが王でありメシアであることを否定し、議員たちはあざ笑い、兵士たちは侮辱し、犯罪人の一人はののしっています。

ところが、もう一人の犯罪人は、イエスが無実でありながら罪を担おうとしていることを認め「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と憐れみを求めます。

これはイエスの中に救い主、王としての姿を見いだした者の信仰告白の言葉ではないでしょうか。

「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」とイエスはもう一人の犯罪人を温かく励まし慰めています。

本日の福音箇所では、「メシア」と「王」という言葉がそれぞれ2回ずつ使われています。

多くの人々はメシアに強い王の姿を重ね合わせていました。武力や力でもってさまざまな苦しみや抑圧から自分たちを解放し、自由と平和をもたらしてくれる王をイエスに期待したのでした。

しかし、イエスはそのような王、救い主ではありません。全ての人は神に愛されていると説き、隣人を愛し、ゆるすよう呼びかけ、自由と平和をもたらすために十字架に赴いたイエスこそが王であり救い主なのです。

そのようなお方としてイエスを祝うのが「王であるキリスト」の祭日です。

（立花昌和神父／東京教区）

主日の福音解説

11月30日（待降節第1主日）
マタイ 24・37－44

目を覚ましていなさい

待降節第1主日を迎え、今日からまた新たな典礼暦年（A年）が始まります。

本日の第一朗読で読まれるイザヤ2章1節－5節は、終わりの日に主の山へ全ての国々が集まり、主の教えを受けて平和が広がるという預言です。武器は農具に変えられ、争いはやみます。

キリスト者にとってこれは、キリストにおいて実現する神の国の希望を示します。私たちはミサと日々の生活で主の道を歩み、平和の使者として世界に愛と和解を広げるよう招かれています。今こそ「主の光の中を歩もう」との呼びかけに応える時です。

第二朗読のローマ13章11節－14a節は、救いの完成が近づいていることを告げ、眠りから覚め、光の子として歩むよう促しています。闇の行いを脱ぎ捨て、主イエス・キリストを身にまとうことが勧められているからです。

私たちにとってこれは、待降節の備えや日々の回心への呼びかけです。私たちは自己中心的な生き方や罪から離れ、愛と善行をもって歩むよう招かれています。

「キリストを着る」とは、その心と行いを自分のものとし、世に光をもたらすことです。

福音箇所であるマタイ24章37節－44節は、ノアの時代のように、人々が普通の生活を送る中で突然終わりが訪れることを示しています。だからこそ、いつ主が来られてもいいよう、目を覚まし備えるようにと勧められています。

キリスト者にとってこれは、待降節の中心的メッセージです。日々の祈り、ミサ、愛の実践を通して心を清め、主との出会いに備えることが大切です。

「目を覚ましていなさい」との言葉は、永遠の命への希望に生きる招きです。

以上のことから、今日のみことばのつながりが見えてきます。第一朗読は、終わりの日に神の教えによって平和が実現する希望を表しています。第二朗読では、その希望に向かって今こそ眠り

から覚め、光の子として歩むよう勧められ、そして福音朗読では、その時が突然訪れると告げられているために常に目を覚まして備えるように求められています。

これらの三つの箇所はいずれも、「神の国の完成」という同じ終末的希望を背景にしており、私たちは、希望を待ち望むだけでなく、日々の生活においてキリストを身にまとい、平和と愛を広げることにより、その希望に応えるよう招かれています。

待降節は、まさにこの目覚めと備えの時だと言えます。

（出水洋神父／京都教区 カットは全て高崎紀子）



文化

大好きな雑誌のコラムが終わりたり一編のコラムに雑誌は軽く

那須塩原 林 秀雄

【評】愛読していた雑誌のコラム、連載が終わったことにながっかりする作者。たった「一編のコラム」だが、雑誌の重さは内容次第との把握、「軽く」なったとの表現が勘所。

浦上の松明行列火を継いで被爆マリアの涙拭いつ
何処からか高き空より二羽の鳩吸い込まれゆく平和の鐘に
幾たび心してもあたらしくならない我といふ革袋
会話無き日々を過ぎしわが身には歌ミサ嬉し魅りの時
大空に飛行機雲の十字架よ平和への道天に願いを
梨二つ到来ものをお裾分け昭和の残る近所づきあい
聖母の日教会の園ササユリが目にもまぶしく白く輝く
片麻痺の姉の傍へに身をよせて寝息を聞きてタベ安らぐ
やわらかいバラの芽が春の陽を浴びるすくすく育て小さきものよ

岡山	秦野	名古屋	東京	福岡	横浜	川崎	東京	長崎
宮崎	遠藤	富井	千葉	山口	永井	印出	向井	服部
清子	伸枝	弘光	明子	春江	栄司	美由紀	美和子	のりこ

短歌

春日てみ道

はがきでの短歌投稿の規定は左下枠内を参照。
下記QRコードからオンライン投稿可。



俳句

稲畑廣太郎選

はがきでの俳句投稿の規定は左下枠内を参照。下記QRコードからオンライン投稿可。



◎空蟬の生きた証を手のひらに 草加 長谷部禎子

【評】抜殻となった空蟬にも注ぐ命への愛情

◎退院の日には青田となつてをり 和泉 中里 君子

【評】入院の歳月を季題に託した感謝の心

夏の雲見上げ黙想会前夜 甲府 新井 志音

原爆忌赦しと和解鐘共に 調布 田邊 久義

耐へ難き残暑続くや翁の身 府中 荒井 美邦

千代紙でつくる封筒白木槿 東京 草間をり絵

響きくる蛸の声万朶かな 四日市 城田 一子

蝉しぐれ古き記憶を脱ぎ捨てて 秦野 小泉早由美

やうやくの試歩の道すぢ風薫る 吹田 野村 愛子

黙祷の黙はひとつに原爆忌 神戸 平尾 孝子

桃を剥く指先のあと実に残し 豊中 岩田 都世

とりあへず一品出すは冷奴 丹波篠山 高岡すみ子

海眺む一つの桃を分け合つて 松山 丹下はつみ

投稿規定

短歌・俳句共に、未発表の自作をはがきまたはオンラインで送りください。一回につき短歌は一人3首まで、俳句は5句まで。お名前に振り仮名を付けてください。はがきの送り先は、〒135-8585 東京都江東区潮見2の10のカトリック中央協議会広報部広報課「短歌係」または「俳句係」。締め切りは毎月5日（必着）です。作品は選者の先生によって添削されることがあります。

去りし人野分の音の眠れぬ日

夢一瞬父のハグする夏の夜

名にし負ふ見せばや咲きて誇らし気

緩やかに初鴨を待つ水面かな

神戸 高橋たづ子

豊中 成瀬きよみ

福岡 三谷 淑美

選者吟

計 報

田代梅(うめ)修道女 (ノートルダム教育修道女会) 8月28日、米国メリーランド州の高齢者施設で逝去。94歳。1931年東京都生まれ。54年同会



入会。57年初誓願。同会設立のノートルダム女学院中学高等学校で英語の教師を務めた後、ノートルダム女子大学に勤務した。77年から93年3月まで、同大学学長と学校法人ノートルダム女学院の理事長を兼務した(以上京都)。長年海外で生活し、96年には客員教授として中国の曲阜(チューフー)師範大学で、97年にはメリーランド州のNotre Dame Preparatory School(ノートルダム プレパトリー スクール)で日本語を教えた。おおらかで、小さいことにこだわらない性格だった。寛大な心で姉妹、学生、教職員に接した。

畑(はた)千恵子修道女 (ノートルダム教育修道女会) 9月16



日、京都市内の病院で誤嚥(ごえん)性肺炎のため逝去。91歳。1933年京都府生まれ。

59年同会入会。61年初誓願。ノートルダム学院小学校の英語教諭、ノートルダム女学院中学高等学校の英語教諭や寄宿舎舎監(以上京都)、聖心(せいしん)教会、聖心学園、南山大学のロゴスセンター(以上愛知)、同会のローマ総本部、児童館、障がい者施設での奉仕など、多彩な使徒職に従事した。世界に広がる国際修道会のニュースを熱心に入手し、環境保護、平和活動に取り組んだ。共同体の祝いや逝去会員への祈りでは、雰囲気細やかに整えていた。創造的で器用だったので、裁縫、編

み物、料理などを通して常に姉妹や人々を喜ばせていた。

後藤文雄神父 (神言修道会) 9月17日、誤嚥(ごえん)性肺炎のため逝去。96歳。



1929年新潟県生まれ。52年同会入会。54年初誓願。60年終生誓願ならびに司祭叙階。61年南山助任ならびに南山中学・高等学校教諭。62年小神学生指導司祭(以上愛知)。63年吉祥寺助任(東京)。70年南山主任。74年吉祥寺主任。86年恵方町(えほうちょう)主任(愛知)。94年吉祥寺主任。96年から吉祥寺助任および共住司祭。2004年「AMATAK(アマタック)カンボジアと共に生きる会」代表。06年にはカンボジアの子どもたちへの教育支援活動が評価され、第10回「米百俵賞」受賞。07年第19回「毎日国際交流賞」受賞。17年アマタック友の会設立ならびに相談役。1981年から94年にかけて、カンボジア難民の子ども14人を日本に引き取り、多くの苦難を共に乗り越えながら里子として育てた。95年から2016年にかけて、里子の一人と共にカンボジアで学校建設を始め、完成した数は19校を数える。主な著書に『カンボジア発 ともに生きる世界里子を育て支援を広げる神父の目から』(女子パウロ会)、『よし!学校をつくろう 神父ゴッちゃんの履歴書』(講談社)、『今ここに「15歳の巡礼」を歩き終えたら』(講談社)。またその実践は多くのメディアを通して紹介された。カンボジアでの活動をはじめ、教会司牧においても日常生活においても、自分ができる方法で、助けを求めている多くの人々のために行動した。

告知板

■全 国
▶**こころといのちの法律相談** (無料電話相談) 11月28日(金)午後3時~7時。くらし・職場・借金・家庭などのさまざまな悩みを抱える市民のための無料電話相談(未成年者可)。弁護士および精神保健福祉士が相談に応じる。相談電話番号は03-6257-1007(全国からの電話受付/通話料有料)または0120-556-289(東京・千葉・神奈川・埼玉・茨城・栃木・群馬発信限定/フリーダイヤル)。いずれも上記相談日限りの電話番号。電話03-3595-8583 第一東京弁護士会人権法制課
■千 葉
▶**展覧会「ムラ カズユキ展」**

11月14日(金)~26日(水)午前11時~午後6時(17日<月>、20日<木>、25日<火>休み/最終日午後4時まで)、ギャラリー睦(むつ/千葉市)。電話043-287-2355
ギャラリー睦

■兵 庫
▶**カトリック芦屋教会オープンチャーチ・フェスタ2025** 11月3日(月・祝)午前10時~午後3時、芦屋教会。地域や巡礼者に教会を身近に感じてもらうための信徒の手作りイベント。ステージイベント、子どものひろば、ショップ、フード・ドリンク。午後3時から感謝ミサ。入場無料。☒ocf2025.ashiya@gmail.com 同フェスタ実行委員会

番 組

ラジオ心のともしび
(朗読・坪井木の実)
11月の放送日と執筆者 1日(土)古川利雅・3日(月)湯川千恵子・4日(火)片柳弘史・5日(水)コリー・ダルトン・6日(木)熊本洋(よう)・7日(金)山本久美子・8日(土)古橋昌尚・10日(月)西田仁・11日(火)末盛千枝子・12日(水)許書寧(きょ・しゅにん)・13日(木)中井俊已・14日(金)森田直樹・15日(土)服部剛(ごう)・17日(月)岡野絵里子・18日(火)竹内修一(おさむ)・19日(水)三

宮麻由子・20日(木)今井美沙子・21日(金)下窄優美(しもさこ・ゆうみ)・22日(土)堀妙子・24日(月)松浦信行・25日(火)山本ふみり・26日(水)崔友本枝(ちえー・ともえ)・27日(木)植村高雄・28日(金)萩原久美子・29日(土)村田佳代子(以上テーマ「忘れられない人」)。ホームページ(下記QRコードでアクセス可)では24時間視聴可能。詳細は電話075-211-9341。



次号に関するお知らせ

カトリックジャパンダイジェストは、今年3月に週刊カトリック新聞が休刊になった後、カトリック教会に関する情報の発信が途切れないよう4月から発行して参りました。4月のニュースをまとめて4月号に掲載しましたが、それが読者の皆様のお手元に届くのは5月最初と

り、入手月と発行号数がずれることになりました。このずれを解消するため、11月末に発行する号を「11月12月合併号」とし、12月最初の日曜日までに届くよう発送致します。待降節を迎える時期ですので、クリスマスの準備となる内容も掲載する予定です。

きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク)11月

【教皇の意向：自殺防止】

自殺の誘惑にさらされている人々が、地域社会での必要な支援やケアを受け、愛に触れて、人生の美しさに心を開くことができますように。

【日本の教会の意向：日本と韓国の教会】

隣国である日本と韓国の教会が、福音宣教のために助け合い、未来に向けてよりよい協力関係を築いていくことができますように。

世界保健機関(WHO)の統計によると、世界で毎年70万人を超える人々が自ら命を絶っています。また低・中所得国に全自殺の70%以上が集中しています。これは

個人の問題だけでなく、自殺に社会的、経済的な構造の問題があることを示唆し、国内だけでなく国際的な支援の必要を促しています。同時に、超過労働、孤独、差別やいじめなどで追い詰められ自死に至るケースもあります。神の慈しみは全ての人に及び、人が自分に絶望しても、神がその人に絶望されることは決してありません。地域社会が身近な所で、苦しみを抱えた人の叫びを聞くアンテナを広げ、丁寧に寄り添い、希望と人生の素晴らしさを見いだせる手助けをしていけるよう祈りましょう。

＊

日本と韓国のカトリック教会はこれまでさまざまな形で交流を深めてきました。

1996年から始まった日韓司教交流会は今年で27回目を迎えます。これまで、和解や平和、また共同宣教について声明を発表してきました。特に司祭の高齢化や召命減少を助けるために韓国の司祭が日本の各教区で惜しみなく奉仕しています。加えて双方の信徒がそれぞれ日本巡礼や韓国巡礼を続けています。若者の交流も頻繁にあり、特にワールドユースデー(WYD)ソウル大会2027に向けた日韓の若者の連携も活発です。歴史的経緯による緊張や対立を越え、神の家族の仲間同士として日韓の教会が交流と協力を深め、双方の国と社会に福音を広めていけるよう祈りましょう。